3　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。〈富山大〉　二〇一六年度出題

　私たちはいったいなぜこれほど生きづらくなったのでしょう。お金がないからでしょうか。先行きのアホショウがないからでしょうか。夢が持てないからでしょうか。仕事がないからでしょうか。それとも、生き甲斐を見つけられないからでしょうか。

　そのいずれも少しずつ当たっているのですが、私はより本質的な理由として次の三つについて考えてみたいと思います。

　まず一つ目は、グローバリゼーションが進み、多様化が進むどころか、むしろ人びとの価値観がイ画一化し、「」というものを考えられなくなったことです。

　どんなものごとでも答えは一つではありません。常識的によいといわれていることのほかにも、自分にとって最適の何かがあるはずです。しかし、多くの人がそれを見つけられなくなっているのです。

　たとえば、進学、就職、収入、社会活動、人間関係、恋愛、あるいは趣味や暮らし方……。どのような生き方が賢くて、どのような働き方が尊敬されて、どのような生活スタイルがカッコいいのか。そうしたことについての価値観が異様なくらい画一的になっていて、それ以外のものを思いめぐらす想像力がないのです。一つの価値観しか持っていないと、それが崩れたときに逃げ場がないという恐ろしさがあります。

　いじめやひきこもりなどの問題も、①これと無関係ではありません。先だってこんなことがありました。ある若者から、いじめにあって学校に行けなくなり、家庭内でもうまくいかず、悩んでいるという話を聞いたのです。そこで私は、それなら家出でもして知らない土地に行ってやり直したらどうかと言いました。すると、家出？　そんなことは思いもよらない、そういうことではなく、いまこの現状をよくするためにはどうしたらいいかを知りたいのだという、まったくすれ違いの反応が返ってきました。

　私としては、その生き方がどうしても苦しいならリセットしたらいいと思うのです。いまの学校がだめなら別の学校に入る。いまの土地がだめならよそへ行く。家族との関係がだめなら一人暮らしをする。コンビニなどでバイトでもすれば若者一人くらいなんとか生きていけるでしょう。我慢したあげくに死を選んでしまうより、まったくいいはずです。

　それにもかかわらず、いま自分が手にしている価値観を捨てられない人が多いのです。それを捨て去っても人生は続く、いくらでも別の人生はあるというふうに考えられなくなっているのかもしれません。

　私が青春時代を送ったころには、そうではなかった気がします。一九七〇年代、多くの若者はこの日本に理想や希望があるなどとは思っておらず、こんな社会なんかくそっくらえだと息まき、むしろ中国やパレスチナにパラダイスがあると信じていたりしました――実際にはその多くはまったくの幻想であったわけですが。とにかく、目の前の社会に自分を合わせようとは思わず、ナップザック一つかついでいっそそっちへ行ってしまおうと本気で言ったりしていました。それがよかったのか悪かったのかは別として、少なくともボヘミアンになることをあまり恐れていませんでした。

　しかしいまは、自分が生きている世の中が生きづらいと思ったとき、多くの人がそれについていけない自分のほうを否定しがちです。世の中がおかしいと思っても、自分のほうを曲げてそこで成功しようとするのです。いったいいつの間に私たちはこんなに②ものわかりがよくなったのでしょうか。

　いや、いまだって田舎へ移ってスローライフを始めたりする個性派はいるという反論があるかもしれません。しかし、それらをじっくり眺めれば、多くの場合、やはり③現代的な価値観によって担保されたスローライフで、真正の自給自足やサヴァイヴァルではないことに気づくでしょう。「そうは言っても、金がなきゃ話にならない」とか「老後はちゃんと困らないようにしてある」とか、何かあてにできるものを確保した上でのものなのではないでしょうか。

　代替案を考えられない心は幅のない心であり、体力のない心だと思います。言い換えれば、心の豊かさとは、究極のところ複数の選択肢を考えられる柔軟性があるということなのです。現実はいま目の前にあるものだけではないとして、もう一つの現実を思い浮かべることのできる想像力のことなのです。

　二つ目は、人と人とのつながりが薄れ、危機に陥っても誰も助けてくれない、少なくともそう思っている人びとが多いということです。

　たとえば、大学を卒業しても職につけない人、リストラにあって再就職の見込みもない人、成果をあげられず仕事が回ってこない人、健康保険料を払えず病気の治療もできない人、心を病んで家から出ることもできなくなってしまった人……。そういう人を見ても、手が差し伸べられなくなりつつあります。

　誰しもそういう人を気の毒に思わないわけではないのです。痛ましくも思うのです。しかし、見て見ぬふりをしてしまう人が多いのです。明日はわが身かもしれないと恐れるあまり、かかわりあいになることを避け、ガードを固めているのです。ふと見渡せば、われわれはみな孤立して、〝隣人〟を失ってしまいつつあるのではないでしょうか。

　私たちはいつから相互ウフジョの精神を忘れたのでしょう。いつから「お互いさま」が死語になったのでしょう。いまでは、困っている人を助けないことを冷血と非難するより、むしろ、怠け者に足をひっぱられるのは不合理だという考え方のほうが先に立ちます。悲しいことですが、社会全体の通念がすでにそうなりつつあります。

　「働かない者になぜ金をやるのか」「できない者に仕事を与える必要はない」「失敗したのはリスク管理能力がないからだ」

　このような考え方には、すべての責任を［　Ⅰ　］の問題に還元して、［　Ⅱ　］に不利益が生じないようにしようとする意識がそこに見えます。

　友人関係などもそうです。たいていの人が深い人づきあいをすることを避け、いざとなったらサッと切ることができるような関係しか築こうとしません。そこに一抹の物足らなさはあるのです。しかし、突っこんだ関係になってあとで面倒なことになるほうを心配するのです。

　「社会は存在しない。あるのは家族とせいぜい個人だけだ」というサッチャー流の新自由主義に対してはまだ多くの人びとが違和感を持っていた時代、社会はみなが互いを支えあう網の目のようなものであるという感覚が生きていた時代、私たちはよい意味でそのしがらみにからめ取られて生きていました。じっさい、それがあるから、人は多少失敗しても即座にエナラクの底に落ちたりせずにすんでいたのです。でもいまは違います。個人はばらばらの原子のように切り離されていますから、ひとたびことが起これば、即座に滑り台を落ちるように悲惨な状況に突き落とされてしまうのです。

　もちろん、こう言ったからといって、全面的に昔に戻れと主張しているわけではないのです。人の助けを借りず、自分の力で前途を切り開いていく努力は必要でしょう。しかし、人はそもそも一人では生きていけないのです。それは生きものとしての宿命のようなものです。だから、やはり「人とともに生きていく」という考え方が、社会の土台になければなりません。

　人心の安定と社会の安定は密接に関係しています。たとえば絶体絶命の危機に陥っても、自分の隣に確実に隣人がいて、金銭の面倒まで見てくれないにしても無視されることはなく、少なくとも同情はしてくれる。そのようなことが当たり前になっていれば、人はそれほどひどい恨みの情を抱いたり社会に憎しみを覚えたりはしないはずです。

　またそれは④社会全体の創造性のようなことにも関係してきます。「失敗しても生死にかかわるほどのことじゃない」という安心感があれば、人は思いきってチャレンジすることができます。逆に、「失敗したらあとがない」と追い詰められたら、極端に慎重にならざるをえません。その結果、みんなが大きな冒険をしなくなって社会全体が萎縮してしまうのです。大失敗がなくなるので無駄は減るかもしれませんが、革新的なものも生まれなくなります。なんのおもしろみもない世界になっていくような気がします。

　三つ目は、いま述べた二つのこととも関係するのですが、価値観が画一化し、選択肢が少なくなったために発想力が貧困になって、何をしたらいいかわからなくなったことです。

　失敗しても誰も助けてくれませんから、みな恐怖にかられて必死に走りはするのです。しかし、そうでありながら、自分は何をめざすのかという目標が見つかりません。これでいいのだという確信が持てないのに止まるわけにもいかないので、無闇に走っていかざるをえないのです。その果てに精も根も尽きはててしまう。これもまた、いま多くの人が心の病に陥っている大きな理由だと思います。

　では、なぜこのような事態になったのでしょう。その背景を探っていくとき、私は二十世紀中ごろに生まれた戦後世代、とりわけ⑤「団塊の世代」といわれる人びとの功罪を考えることがあります。いまの心の危機は、とりわけ一九七〇年代の終わりごろから隣人を支えない社会が進んでいく中で深刻化していったように思うのですが、その時代に最大の社会の担い手であったのが彼らだからです。

　一九五〇年代終わりから一九七〇年ごろまでの高度成長時代は、一見非常にに富んでいるようでありながら、思想のあり方としてはかなり保守的でした。なぜかと言うと、戦争で完膚なきまでに敗北し極度の貧困に陥ったので、二度とこのような事態にならぬようにしよう、ぜったいにオ破綻しない国づくりをしようと、終身雇用や年功序列、年金や保険、失業にかかわる制度など、さまざまな互助システムを整えていったからです。このような中で経済大国の功労者である日本型のサラリーマンができあがっていきました。

　しかし、戦後三十年もたったころにはそのありがたみが薄れ、新しい世代はそれらを煩わしい足と感じるようになりました。それが「団塊の世代」なのです。彼らは革新的な未来を作っていくためには過去の遺産は邪魔だと考えました。未熟で尊大な反抗精神から、旧世代がカエイエイと築きあげたみんなで支えあうシステムを壊していったのです。

　冷静にふり返ると、けっきょくのところ、彼らがやりたかったことは考え抜かれた個人主義でもなく、透徹した左翼の思想でもなく、ただ「自分」というものを自在にさせたいという、移り気な自分中心主義でしかなかったような気がします。朝鮮戦争が始まった年に生まれた私は、いわゆる「団塊の世代」の一年あとの世代に属します。その意味で彼らの心情はわからないわけではありません。しかし、「在日」の私は、そもそも、彼らが叩き壊そうとした「体制」からつま弾きにされていたのですから、彼らの「造反有理」に強い反発心を抱かざるをえませんでした。「体制」の中で生きていけることは、私の目には特権に映ったのです。そしてその特権をみずから放棄する彼らは、最大の特権階級のように見えたのです。

　やがて冷戦が終わり、ソ連や東欧の社会主義体制が崩壊し、経済成長も終わり、戦後世界で掲げられていた神話は続々と地に堕ちたわけですが、そうなったとき代替案となるものは何も残っていませんでした。人情も助けあいの心もなく、清貧の思想もなく、勇敢な冒険の心もありません。そんな焼け野原のような地面の上を、グローバリゼーションという名の激烈な市場経済のパワーが一面、⑥ローラーをかけるように猛進していくことになったのです。

　いま思えば、資本主義の中にも、ある時期まではいくつかの異なったタイプがあったような気がします。たとえば、かつて「企業文化」という言葉があったように、経済活動をただ即物的なマネーの循環と見るのではなく、文化や芸術の要素を加味して付加価値のあるものにしようという考え方もありました。しかし、いまの資本主義にはそんなものはありません。あるのは万国共通の無味乾燥な数字だけです。勝ち負けと損得というすれっからしの概念だけです。その下で、なんの展望もなく、どこにも結びあわされておらず、何をしたらいいのかわからないバラバラの個人が、ドングリの背比べ的なせせこましい競争をして、神経をすり減らしているのです。

　単一な価値観しか持たないグローバル競争社会と、その中で危機にしている人びとの心。そのすべてのめを「団塊の世代」に負わせることはお門違いです。また世代論ほど、大味でぶっきらぼうな議論はありません。それでも、彼らのツケをいま払わされている側面はかなりあるのではないかと思えてなりません。

（姜尚中『心の力』より）

注　○サッチャー――マーガレット・サッチャー。英国史上初の女性首相（在任一九七九年～一九九〇年）。

○造反有理――体制や権力に逆らうのには、それなりの道理がある、ということ。

問１　傍線ア、ウ、エ、カの片仮名を漢字に直し、イ、オの漢字の読み方を平仮名で書け。

問２　傍線①「これ」とは何か、八〇字以内で記せ。

問３　傍線②「ものわかりがよくなった」とは、「私たち」のどのような態度について述べているのか、八〇字以内で記せ。

問４　傍線③「現代的な価値観によって担保されたスローライフ」とは、具体的にどのようなスローライフか、三〇字以内で記せ。

問５　空欄Ⅰ、Ⅱに入る最も適当な漢字二文字をそれぞれ文中から選び出し記せ。

問６　何が、傍線④「社会全体の創造性のようなことにも関係」するというのか、著者の考えに沿って四〇字以内でまとめよ。

問７　著者は、傍線⑤「「団塊の世代」といわれる人びとの功罪」のうち、「罪」をどのようにとらえているか、四〇字以内で記せ。

◎問８　傍線部⑥「ローラーをかけるように猛進していくことになった」とは、何のどのような状態を述べているか、簡単に説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　ア＝保証　　イ＝かくいつか　　ウ＝扶助

　　　エ＝奈落　　オ＝はたん　　　　カ＝営々

問２　Ａグローバリゼーションが進むことで、現代人は、Ｂ画一的な価値観を抱き、Ｃ他の価値観を思いめぐらす想像力を失ったので、Ｄその価値観が崩れたときに逃げ場がなくなること。（７８字）

Ａ＝２／Ｂ＝３／Ｃ＝３／Ｄ＝２

Ｃがなければ全体０。

問３　Ａ世の中に生きづらさを感じ、Ｂたとえ世の中がおかしいと思っても、　　Ｃ従来の価値観を否定するのではなく、Ｄ自分の生き方を曲げて世の中に自分を合わせようとする態度。（７５字）

Ａ＝２／Ｂ＝２／Ｃ＝２

Ｄ＝４〔「自分の生き方を曲げる」の内容、あるいは「世の中に自分を合わせる」の内容、いずれかだけのものは減点２。〕

Ｄがなければ全体０。

問４　Ａ経済的に Ｂ何かあてにできるものを確保した上での田舎暮らし。（２８字）

Ａ＝５

Ｂ＝５〔「田舎暮らし」の部分は「スローライフ」のままでも可。〕

Ｂがなければ全体０。

問５　Ⅰ＝個人　Ⅱ＝社会

問６　社会はＡみなが互いを支えあう網の目のようなものであるという、Ｂ人心の安定した感覚。（３９字）

Ａ＝５〔「人々の相互扶助」について述べられていれば可。〕

Ｂ＝５〔「安心感」なども可。〕

Ａがなければ全体０。

問７　Ａ自己中心的な Ｂ未熟で尊大な反抗精神から Ｃ旧世代の築いた互助システムを破壊したこと。（３９字）

Ａ＝３／Ｂ＝３

Ｃ＝４〔「旧世代の築いた」の内容がなければ減点２。〕

Ｃがなければ全体０。

問８　Ａ日本社会が、Ｂグローバリゼーションという名の激烈な市場経済に押されて、Ｃ万国共通の無味乾燥な数字だけで勝ち負けと損得を競い、Ｄ神経をすり減らしている状態。

Ａ＝３／Ｂ＝３／Ｃ＝２／Ｄ＝２

Ｂがなければ全体０。